

曹植「三良詩」に関する研究

——曹植作品に見る忠義と殉死——

弘前大学人文社会科学部 文化創生課程文化資源学コース

熊谷 実輝（東アジア文化論ゼミ）

序

曹植（192～232年）は、中国の三国時代の代表的な文学者である。華北地域を平定した曹操を父に、魏の初代皇帝となった曹丕を兄に持ち、曹氏一族として複雑な生涯を送る中で多くの文学作品を著した。そのひとつが、のちの『文選』にも収録される「三良詩」である。三良とは、春秋時代の故事に見える名で、秦の穆公に仕えた三名臣である奄息・仲行・鍼虎のことをさす。穆公が亡くなると、彼らは主君のために殉死した。曹植「三良詩」はこの故事について五言詩の形式で詠んだものである。

三良の殉死について、曹植はどう考えているだろうか。それが当時の忠義観や殉死観とどのように関連しているだろうか。本稿は曹植「三良詩」の先行研究を整理したうえで、三良を扱った歴代の文学作品と、「三良詩」に関連する曹植の他の作品を解説し、三国時代の殉死の実態について考察することによって、曹植作品に見える忠義と殉死を検討する。

第一章 曹植による三良評価

本章では、先行研究を踏まえて曹植「三良詩」を解説し、それに見られる三良評価を検討した。「三良詩」は全体を大きく二部に分けることができる。一・二句目で一般論的な総括を述べ、三～十四句目で三良の逸話を詠んでおり、主に「功名は為すべからず、忠義は我の安んずる所なり（功名不可為、忠義我所安）」という冒頭二句で曹植の見解が主張されている。本稿の先行研究としては、矢田博士氏の「曹植「三良詩」考―「文帝誄」との関係を中心として―」（1993年）、アメリカのロバート・ジョー・カッター氏の“On Reading Cao Zhi’s ‘Three Good Man’: Yong shi shi or Deng lin shi”（1998年）が主なるものであるが、曹植「三良詩」が成立した年代についての双方の意見は分かれている。これに鑑みて、本稿では「三良詩」の成立年代の問題を一旦置いて、曹植が詠んだ三良は自分の意志で殉死に赴いたと理解したうえで、歴代の三良詩や、「三良詩」以外の曹植の作品との比較によって、曹植の忠義観や殉死観を探ろうと考えている。

第二章 曹植以外の三良評価の概観

三良が殉死するに至った理由については、三良が穆公に死を強要されたとする説と、自らの意思で積極的に死に赴いたとする説があるのだが、本章ではまず、先秦時代から後漢時代までの三良についての記述を集め、それぞれの三良評価について整理した。最も成立の早い『詩経』秦風「黄鳥」はどちらの説にも該当していない。戦国時代に成立した「詩序」・『春秋左氏伝』、前漢に成立した『史記』この三つの文献は三良を殉死させた穆公を批判しており、殉死強要説に立っている。後漢の鄭玄と応劭は、両者とも三良が自ら殉死に赴いた意思を認めており、殉死積極説に立っている。このことから考えると、殉死強要説は前漢以前に見え、殉死積極説は後漢以降に見えるという、時代的な傾向が明らかである。

また、曹植以外の歴代の三良詩についても、その三良評価を整理した。清の朱緒曾『曹集考異』を参考にし、三国時代から北宋時代まで三良を詠んだ詩を八首集めた。それぞれ読解したうえで、殉死強要説に立ち、結果穆公を批判する内容になっている詩と、殉死積極説に立ち、結果三良の殉死を称賛・肯定する内容になっている詩の二種類に分類を試みた。その結果、穆公への批判が明確に読み取れた詩は二首、三良の殉死の称賛・肯定が明確に読み取れたものは三首、どちらの趣旨にもそぐわないものは二首であった。年代順にして検討を行ったが、時代によってどちらの立場をとる作品が多いかの傾向は特に見られなかった。どの時代においても、穆公と三良に対する評価は分かれていると結論付けた。

第三章 曹植「三良詩」の反映するもの

本章では曹植「白馬篇」「文帝誄」「求自試表」を解読し、殉死に対する曹植の見解を考察した。「白馬篇」は曹植の代表的な楽府詩で、騎馬武者である「遊俠児」を詠んだものである。末尾二句で「軀を捐てて国難に赴く、死を視ること忽ち帰するがごとし(捐軀赴国難、視死忽如帰)」と結ばれるように、「遊俠児」の、国難のために命を捨てる覚悟を肯定的に描く内容である。「文帝誄」は曹植の兄であり魏の初代皇帝でもある曹丕の崩御の際、曹植がその功績を称え、死を悼んだ文章である。「三良を追慕し、甘心して穴を同じくせんとす(追慕三良、甘心同穴)」の二句で、三良に倣って君主に殉死したい意思をほのめかしている。曹植は曹丕の即位前、跡目の座をめぐる曹丕と対立しており、曹丕に反抗する意思がないことを曹丕の即位後も示し続ける必要があり、この「文帝誄」でもそのような事情から三良の名前を出すに至っている。三良の殉死積極説に立っている表現であることに注目した。「求自試表」は、曹丕の跡を継いだ魏の第二代皇帝である曹叡に、対外戦争に従軍することを願い出た上奏文

である。結局、曹植の望みは聞き入れられることがなかった。本文中には「軀を捐つ（捐軀）」「身は屠裂すると雖も（身雖屠裂）」「身を殺して乱を静む（殺身静乱）」といった表現が見え、国難のために死をも厭わず戦う覚悟が繰り返し述べられる。「白馬篇」で詠まれたような自己犠牲的な覚悟が、この作品では曹植自身のものとして示されることに注目した。

曹植作品に示された忠義を考えるにあたり、本稿では「義」に注目し、その意味の変遷から曹植の忠義観を検討した。先秦時代の文献に見られる「義」には大きく二種類ある。一つは『論語』『孟子』に見られるもので、家族関係の中にその端緒が現れ、最終的に君臣関係の序列の中に現れるとされる、タテ的・体制的な「君臣の義」である。もう一つは『墨子』に見られる、利他や自己犠牲といった特徴を持つ、ヨコの・民間的な「遊侠の義」である。曹植作品について考えると、「君臣の義」と「遊侠の義」の両方の特徴を併せ持っていると言える。「義」の対象が国や自身の君主、ひいては自分の血縁者であるところは「君臣の義」の特徴であり、そのために身命を賭す覚悟を強調するのは「遊侠の義」の特徴である。

前漢の司馬遷は『史記』遊侠列伝の中で、遊侠を体制的な正義に従わない者たちとし、二つの価値観が相反することを示した。後漢時代には、経済格差が広がり飢饉が相次ぐ世相により、王朝末期までに「遊侠の義」の存在感が増した。この流れを汲んだ曹植は、ふたつの「義」をその文学作品の中で融合させたと思われる。

第四章 曹植の時代の葬制と殉死

本章では三国時代の殉死の実態についてまとめ、曹植と実際の行為としての殉死との距離感について考察した。曹操・曹丕はそれぞれ自身の墓・葬儀について生前に指示しており、その布令が『三国志』に見える。それによると二人とも薄葬によって自身を葬るよう言い残していたという。また曹操墓については、河南省安陽市で発見された三国時代の陵墓、西高穴二号墓の被葬者が曹操であるとする説が有力視されており、考古学方面からも曹操の陵墓について考察ができる。「曹操高陵」と呼ばれるこの遺跡は、その規模・盛り土のない形式が、曹操の遺令にある「薄葬」の特徴に合致する。また「厚葬」の要素のひとつには奴隷や妾の殉葬があるが、曹操高陵からはその痕跡は見られない。曹操高陵からは曹操と目される男性の遺骨と別に発見された二人の女性の遺骨が発見されているが、殉葬者ではなく、合葬された曹操の妻ではないかと鑑定されている。「薄葬」を是とした曹操は人の殉葬を行っておらず、それは曹丕も同じであっただろう。文献資料からも考古資料からも、曹氏一族が殉死を行っていたとは言えない。

三国時代の殉死については『三国志』呉書に、呉の君主孫権が寵愛する臣下の死に際して

その臣下の愛妾に殉死を命じた記載がある。この事件について裴松之の注は、肯定的な意見と否定的な意見の両方を引いている。西晋時代に著された呉の歴史書である『江表伝』ではこの事件を、孫権が臣下に対してよい行いをした事例の一つとし、孫権はこれによって人望を得たとしている。しかし東晋時代の歴史家である孫盛は同じ事件について、臣下の愛妾を殉死させた孫権を厳しく批判している。このように三国時代には、殉死を是とする価値観も地方によって存在したようである。しかし、これはあくまで地方によるものであり、曹植のいる魏の文化圏では孫盛と同じように、殉死に批判的な価値観を重んじていたと思われる。

結

以上の考察を通して、本稿は下記の結論を得た。曹植「三良詩」に現れた三良評価は当時歴史的に新しかった考え方であり、「三良詩」および曹植の他の作品に現れた「義」のあり方も、歴史的に新しく、さらに独自性を有するものであった。この独自性は、生涯を通じて曹氏一族の身分としがらみの中で生きた曹植の複雑な立場に由来するものである。曹植の生きた華北地域においては、殉死は現実には起こりえない行為であり、忠義に殉じて死ぬことを是とする数々の表現はこの立場からなされたものであった。しかし、現実を離れ、観念の世界の中のみで涵養された表現ゆえに、曹植作品の「義」には独自性が生まれていると考えることができる。